平成16年度定例会発表要旨

平成16年
© 5月6日

中世から近世への大転換
――絵画史料学の視点から――

黒田日出男

絵画を史料として「読む」試みとしての絵画史料学がある。わたしは、それを推進してきた一人である。本日の報告では、自己紹介も兼ねて、そうした試みの一例をお話ししたい。

日本史のなかで、大転換が起こった時期の一つは、一六世紀とその前後であるが、そこに生じた変化・変貌を、絵画史料のなかに描かれた人や動物の姿から読み取って見ると、例えば次の三点が指摘できる。

まず、第一点だが、子どもたちの姿は時代の変貌を鋭敏に表現した。坊主頭・放ち髪・うるし髪・垂髪・短髪などの中国の子どもたちのなかに、一六世紀になると〈唐子〉の姿をした子どもが登場してきた。〈唐子〉髪・芥子坊主の髪型をした子どもたちの服には、兜〈トウトウ〉がつけられた。この兜は中国から入ったものであり、〈唐子〉を愛好する時代としての近世にふさわしいものとなり、金太郎と通称されるに至る。家の永続性と記憶への強い期待と結びついた子どもの姿であり、子どもを〈宝〉とし、夫婦には子どもを丈夫に育てる「子育て」が求められた。

それに対応して、英雄たちも子どもたちになった。金太郎・桃太郎・浦島太郎たちである。子どもたちのための人形やおもちゃが溢れるようになり、七五三や節句の祝いなども庶民レベルにまで年中行事化し、絵巻・赤絵などによって子どもを疫病などから守ろうとする時代としての近世が現れたのである。

第二は、男たちの変貌である。前近代諸社会のどこでも、髭・髯・髷は男らしさの象徴であり、それは日本中世でも変わらなかった。髷についての語彙を見ると、青髷（ひげのそりあがが青々している、敵役の化粧法）、赤髷、黒髷、茨髷（とげとげした固い髷）、髷髷（かざらひげ、濃い類髷）、髷髷（横へなげあがった髷、奴髷）、白髷髷（白い口髭、しらひげ）、総髷（頭中に生えしたひげ）、高面髷（たかざらひげ、盛り上がったおひげ）などがあり、また、口髭・上髭（うわひげ）・下鬘（したひげ、下口髭とも）などともいった。

問題は、近世社会である。幕府は「かぶきもの」の横行を押さえるために相次ぐ禁令を出し、そのなかで髭を立てるのを禁じたのである。髭の禁令は繰り返し出され、ついに上は天皇・将軍・大名から、下は庶民に至るまで、日本の男は髭をやさしくなくなった。

そのこととは、近世の肖像画だけでなく、浮世絵に描かれた男たちの顔を見れば明らかである。それは中世肖像画の男たちは明確に異なる。世界史上でもたいへん珍しい社会の成立であった。

髭に関する語彙も、植髷（お面の毛を植えた髭）、書髷（描髷、油墨で描いた髭）、付け髷・懸髷（耳にかける）、作り髷（つけひげ、かけひげ、墨で描いたひげなど）が現れ、髷の名称も、金髷（金髷様のようなおひげ）、関羽髷（関羽のような長大な髷）、近代になるとカイザル髷（末梢のはね上がった口髭）コールマン髷（米国俳優に
因む、短い口髭）、チャップリン髪（彼の剃り広げた口髭）というように、それ以後は外国人の名前髪が幅をきかすことになったのである。「唐人」は外国人をさす言葉であったが、男が髪を蓄えなくなった近世には、髪を生やしていることが外国人の特徴となり、一七世紀後半には「毛唐人」という言葉の登場となる。すなわち髪を生やした中国人・朝鮮人・オランダ人などが「毛唐人と呼ばれたのである。

第三点は、動物の姿に触れたい。古代・中世の猫は飼われていない。絵巻物でも、物語・説話でも猫は飼われていたことがかたがっている。ところが、浮世絵に描かれた猫たちは皆、放し飼いであり、猫は屋敷で丸くなっている。それらが自然に見えるのは、現代につながる飼い方だからである。

この移転はどうして起こったのか。都市が飛躍的な発展を遂げた時代としての近世の特徴が、猫の飼い方に象徴的に現れている。それは、端的に言えば、近世都市の築生と発展の帰結であった。一六世紀における『鼠の草子』群の出現は、鼠害という都市問題を背景にしている。近世幕藩体制はその対策を迫られたのである。

京都所司代は、慶長七年八月に次の高札を掲げた。

一、洛中猫の網を解き、放し飼いにすべき事
二、同猫売買を止むの事
すなわち、猫をもって鼠を制する都市法令の出現である。その結果として生じた、猫と鼠が犬の悲喜劇は早速、御伽草子『猫のようし』となた（岩波文庫の「御伽草子」などに収録）。

この法令は、たちまちのうちに全国の都市に波及し、その結果として以後の日本社会では猫が放し飼いとなり、犬の方が飼われがちになったのである。

本日お話しした三つは、一六世紀に生じた大転換のほとんどの一部に過ぎないが、子どもたちの姿の〈唐子〉姿への変貌、男たちの世界史に例のない面貌の変貌、そして猫と犬と鼠たちのおかれた立場の変貌、いずれもが中世から近世への変貌の大きさを示しているように思われる。そして、これらの変貌は、文献史料だけでなく重視していた歴史学では見えてこなかった面でもある。

もっとも、一六世紀の大転換の全体的解明は、今後の多大の探求すなわち、文書行政論、遊郭・遊里の文化論、祭礼文化論、捕絵の表現論その他の研究にかかっている。新しい歴史叙述の可能性の模索の一つでもある絵画史料論を、そうした検討の要の一つとしていきたい。また、歴史のイメージ史とイメージとしての歴史について、美術史との対話を深めていきたいと考えている。

【参考文献】

黒田日出男『「髪」の中世と近世』『絵画史料の読み方』（週刊朝日百科日本の歴史別冊歴史の読み方一）、一九八八年

同『動物は時代のシンボル—御伽草子の世界と史実—』『史実と架空の世界』（週刊朝日百科日本の歴史別冊歴史の読み方○）、一九八九年

同『歴史としての御伽草子』ぺりかん社、一九九六年

同『絵巻』子どもの登場』河出書房新社、一九八九年

同『異界の子ども—近世の子ども—浦島太郎・金太郎・桃太郎－』『浮世絵のなかの子どもたち』くもん出版、一九九三年

同『〈唐子〉論—歴史としての子どもの身体をめぐって』『人の〈かたち〉人の〈からだ〉』平凡社、一九九四年

同『江戸期の子どもを社会史的に見る』『浮世絵の子どもたち』東武美術館ほか、一九九四年

同『洛中洛外図を読む』『ものがたり 日本列島に生きた人たち』岩波書店、二〇〇〇年

同『中世日本の唐子—子どものイメージ史のため』『教育学年報八 子ども問題』世織書房、